

「俳句の小径」の石田波郷の二句 ～子供に注ぐ波郷の眼差し～

校長 玉井 啓二

本校の正門のすぐ西側に位置する「俳句の小径」には、松山が輩出した有名な俳人の代表的な俳句を記した句碑が設置されています。7月17日号では、本校の卒業生であり昭和を代表する俳人、石田波郷の句碑が「俳句の小径」に三基あることと、その中の「秋いくとせ石鎚を見ず母を見ず」の俳句について紹介しました。今回は、「俳句の小径」に設置された石田波郷の残りの二基の句碑に記されている俳句を紹介します。

をさな等は海に^{ほたる}螢につかれ寝る 石田波郷

この俳句の季語は「螢」。夏（初夏）の季語です。昔（私が小学生の頃）は、初夏になると川沿いのいたる所で螢を見ることができましたが、護岸整備が進むにつれてめっきり数が減ってしまい、今では見るものがほとんどなくなっています。

以前は、初夏になると海も野も、子供たちには格好の遊び場になっていました。この俳句にも、昼間は海で泳ぎや潜り、磯遊び、あるいは魚釣りをし、夜は螢を追いかけて捕まえてと1日中遊んだことや、そのために疲れ切って眠ってしまっている幼い子供たちの様子が表れています。遊び疲れてくたくたになって眠ってしまった子供たちのかわいらしい寝顔を見ている波郷の眼差しは、きっと優しいものだったでしょう。子供たちの将来の幸せを願っている波郷の姿も想像できます。

では、数多い波郷の俳句の中から、「俳句の小径」の句碑にするためにこの俳句が選ばれたのはなぜでしょう。おそらく、この波郷の俳句を通じて、当時の句碑の設置者から、「元気でたくましく過ごしてほしい。」というメッセージを垣生の子どもたちに伝えるためであったと思われます。本校は、〈豊かな心〉、〈確かな学力〉とともに〈健やかな体〉の育成を長年にわたって目指していますので、その意味でもこの俳句は本校にふさわしいものです。

この波郷の句碑は、「俳句の小径」の入り口の所に設置されています。

あおりんご 青林檎子が食い終る母の前 石田波郷

この俳句の季語は「青林檎」。夏（晩夏）の季語です。「食い」という語から、子供が林檎にかじりついているその勢いが感じられます。さらに、「食い終る」とすることで、子供が青林檎を食べ終わるのをじっと見守り、元気のよい子供の様子に喜びを感じながら「ごちそうさま」を待っている母親の姿が想像できます。勢いよく林檎を食べ尽くした子供と、その様子をほほえみながら見守る母親。このような子供と母親の様子が、青林檎の爽やかさとよく呼応しています。おそらく波郷は、傍らで子供や母親に穏やかな眼差しを送りながら、安らかさや幸福感を覚えていたことでしょう。

この波郷の句碑は、「俳句の小径」の中ほどに設置されています。

今回紹介した波郷の二つの俳句に共通するのは、親子の関係です。そして、両句からは、「子供は親の深い愛情のもとで元気に育ってほしい。」という波郷の願いとともに、波郷の優しい人柄が伝わってきます。私ども教職員をはじめ、大人が子供との関係を問い直すきっかけになるような俳句と言えるでしょう。

【参考】俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト | 五・七・五のころ旅 吟行ナビえひめ

